

早川さんの出版編集会議 2024. 02. 21

名称；早川さん「まずは遊びから始めよ」の出版編集会議

日時；24年2月21日(水)、10時～16時

場所；呉羽青少年自然の家（富山市西金屋字長尾）

プログラム；午前の討論会、食事会、午後の討論会

参加者；午前の部；早川、栗原親子(子1人)、筒井、清水、山中、富樫、山下親子(子3人) 計11人
(敬称略) 午後の部；早川、大平、南、富樫、山下親子(子3人) 計8人

【1】早川さん挨拶(本会議の目的)

これまでの早川活動の集大成として、本に出版を昨年後半より準備し、原案を完成させ、皆さんに読んでいただいた。今回の公開編集会議では、お読みになられた感想をもとに議論をすすめ、よりいい本を作ることになりたい。皆様よろしくお願ひいたします。

【2】参加者自己紹介

- ・栗原親子；福井大で教員。子ども環境に興味有り。福井大の授業の一部を早川さんに担当いただいている。
- ・大平さん；若いころ青年海外協力隊に参加し、ウガンダで4年間活動。子ども2人の親。毎日が疑問の連続で、疑問を楽しんでいる。本業の傍ら、保育園の理事として子ども育成に関わっている。
- ・清水さん；早川先生の弟子です。保育士をしていました。今は呉羽青少年自然の家に勤務しています。
- ・筒井さん；研究者ではないですが、勉強したく参加しました。
- ・富樫さん；早川さんとは呉羽中学校校舎の取り壊し反対の時に出会い、その後、こども環境学会の懇親会で再会。実践家を支援する北陸こども環境研究会で早川さんを応援しています。
- ・中山さん；せいさ高にボランティアしている息子が参加できず代わりに(私)母が参加。早川さんのファンです。
- ・南さん；人間力を養う探求塾を創設運営。頑張っています。
- ・山下親子；大学での教育実習のときに早川先生と出会いました。今は早川先生の補佐で頑張っています。

【3】各人意見発表

午前の部および午後の部では、各自からの本を読んだ感想や意見の発表となった。皆さんは、早川さんの集大成となる今回の本について、素晴らしい、待ち望まれた本、早川さんの情熱の塊、等の賞賛から始めて、本をより良くするために意見を述べ合った。

そうこうして会場が和みだした頃を見計らって、早川さんが初回出版の本に対しての批判や、今回の草稿

本を有識者に見せた時に返ってきた賛美と批判を紹介しながら、皆さんとの間で俯瞰・深堀モードの議論が熱く進行した。

ここで、早川批判について若干記す。早川著作には実践活動の詳細と参加者の感想文の挿入掲載が基本となっていることについて、以前より感想文主体に批判があったが、早川氏は熱っぽくこれに反論して今の早川世界を作り上げたという。今回の出版に際しては、主にエビデンスや論理的構成がないという批判がある。これらを乗り越えることで、早川世界がより多くの方々へ支持され発展することが可能となる。そんな状況理解を念頭に、自由闊達な論議を早川氏中心で各氏との対話による議論が展開された。

以下に、具体的な問題を設定して、各人の声や意見を盛り込むことにした。なお、早川世界とは早川さんの実践が皆さんと共に一つの世界を作り上げている総体のことであり、扱う項目は以下のとおりである。

1. 早川本の捉え方(位置づけ)
2. 誰が読みどう広げていくのか
3. 本の構成(各章独立的構成かつ全体に脈絡貫徹)
4. 参加者も紙上参加(参加者感想文の位置づけ)
5. 日常こそが基本(本質から行動へ)
6. エビデンスの捉え方
7. 早川さんの想い(情熱と理念)が伝わる
8. 著名専門家や活動家から応援メッセージ
9. 今後に向け

A(参考) 早川さんの実践

- (1) 子育てと遊び、(2) 大学生には、(3) 保育士にも

【4】問題項目

1. 早川本の捉え方(位置づけ)

なぜ本を手にして読むのか。本をどう位置付けているか。読み手側の想いから早川本を位置付けとする。

- ・早川さんにとっては本によって自分の想いがより深まっています。
- ・私たちにとって、講演を聞いてもすごいと思います。本ではさらに奥の世界まで見せてくれます。
- ・人に理解いただくには論文調ではなく、語りかける調子がいい。

- ・本では感想文と早川さんの意見が共存のスタイル。すごくいい。
- ・これは、参加者と早川さんが一体となっているとも解釈で出来ます。感想文を書いている方のそばに早川さんが寄り添ってる感じでは。
- ・それを踏まえて、早川の考えが皆さんにより分かるようにしたい。
- ・遊びと仕事が一体となっていることがすばらしい。本の記事では、例えばジャガイモ皮剥き。
- ・イタズラ村づくりでは、そうした行動がエネルギーとなっている。参加者と一緒になって楽しんでみんなで満足している。(早川だけの自己満ではない。)
- ・早川さんを知っている方ならば、今度の本は早川さんの活動の集大成として、知らない人は早川世界の探求として、捉えられます。早川さんの情熱が多くの方をひきつけるはず、といっても過言ではないでしょう。

2. 誰が読みどう広げていくのか

- ・早川ファンでもいいが、若い世代向けや親向けが主でもいい。
 - ・早川氏を知る人(早川ファン、早川講演会に参加した人等)にとっては、早川さんの顔を思い浮かべ、早川さんの声を聞きながら読める。これってすごいことです。
- ▲広げ方
- ・早川さんを良く知るいわゆるファンでもいい。早川さんを知らない人でも、早川世界に入っていけると思う。もちろん、ファンのためのマニアックな本ではなく、ファンが支えする本だから、多くの人に見てもらえるし読んでもらえるはずです。
 - ・早川論が広がっていくことが大事。感想文にはそうした問題についても思いが込められている。多くの人の共感を得ていくことで広がる。
 - ・皆さんの話を聞いていて(後付けですが)、出版には読者をだれに設定するか、年齢層や子育て世代、職業人とかを念頭に置くことが一般的ですが、早川さんがかかわると、人間的感性が知的好奇心を旺盛にしているような感じがしました。それこそ、社会全体の問題として日常の皆様の問題から積み上げていくような。
 - ・絵本は社会や環境を映し出している。早川世界はいわば絵本のようなもの。多くの人にとって日常が一番入りやすい。そして対話が一番。本における対話とは早川さんの参加者が感想文をとおしてさらに対話を重ねているのですね。
 - ・SNSやTV系ではもちろんのこと、一般の本でもしかりです。

▲社会的位置づけ

- ・教育の本にはして欲しくない。今の教育は物事を狭くとらえています。教えるを先行させて学ぶが軽視されがちだから。
- ・小さい時から教えこまれていると、その延長には明るい未来はない。
- ・非認知能力を養ってというが、新しいワードに踊らされている感じがします。そんな言い方をしなくても、実際には昔からやっている。
- ・子供育成は如何にとの問いは、好奇心を喚起させてくれます。読者は子育て中の方々を含め皆さんです。

3. 本の構成(各章独立的構成かつ全体に脈絡貫徹)

- 早川本はどこの章からでも読めるように各章が独立している。そしてまた、序章と終章の両方で本の目的とむすびを明確にして論を構成している。特に前者(各章独立)の構成も譲れぬ様相は、人によっては一貫性がないとか構成に柱がないといった捉え方になる。この点について議論した。
- ・早川論は遊びを核にしてこども育ちを論じているので、対象が多岐多様になるのは当然です。しかし、巷の多くはもつと的を絞った構成になりがちです。だからこそ、多岐多様に対象を扱うからこそ見えてくるものが多く、多岐多様が不思議に自然と互いに繋がり様の様相を醸し出すのです。
 - ・子ども育成について、多岐多様なニーズに応えるのが早川論の真骨頂そのものです。だから、読み手にとっては、面白い順に章を選んで読みこめるといふ、読み手のとっつき方を可能にしています。
 - ・序章と終章；序章では早川論の骨格を打ち出し、各章では肉付けがなされ、終章では各章を含めて全体のまとめと次世代・次時代へのステップとしています。

4. 参加者も紙上参加(参加者感想文の位置づけ)

- 早川氏のこれまでの出版本では実践活動の紹介と共に参加者各位からの感想文を掲載している。この意味はどこにあるのかについて議論した。
- ・若者のイベント本の執筆に際し、早川流感想文の活かし方を真似ます。学ぶは真似るからです。
 - ・感想文は巷の一部の研究者の間ではあまり意味のないものと片付ける風潮があります。
 - ・感想文は、早川実践によって参加者がどう反応したのか、時にはどう意識が変わったのか、赤裸々な心情を表しています。実践は人を動かすのです。こうしたことに価値を見出せないことの方が問題でです。

- ・参加者の心情として感想文は立派なエビデンスです。
- ・実践は人を動かし、人の心情表現が実践の評価となっています。

5. 日常こそが基本(本質から行動へ)

子ども中心の社会構成には親子の関係や社会性が問われてくる。この問題を早川論が日常の生活の健全性として、親子間の遊びで信頼と愛情が構成されるとしている。こうしたアプローチの思考が早川本にはごく普通に展開されている。理論がこうだというのではなく、日常生活そのものに根差している。この点を強調すべきとして議論が進んだ。

- ・親が多忙ゆえに子どもにつらくあたり、しまいにはじめや虐待が始まってしまう。親子遊びを一回したら、親と子がしっかりとしだしました。
- ・当事者性が大事。実態価値を持ち込むと行動だけが分析され、その奥にある心の動きが忘れ去られている。
- ・問題行動の対処療法のみがクロスアップ。心の中を耕せないでいる。
- ・ラテイクでなく物語となぜ言えないのか。
- ・そのままでもいい、シンプルに考えればいい。素直になればいい。

6. エビデンスの捉え方

世の中、エビデンスを裏付けとする実践が意味ありとされる傾向が強い。エビデンスがなければ行動不可というような強制力にしばしば拘束されがちにもなるのではと懸念される。この点からも行動は本来如何にあるべきかという観点で議論した。

- ・知的な人は、論理的になりがち。そんな人は物事に対し批判から入っていく。
- ・世の中エビデンスというが、エビデンスと共に情熱がもっと評価されるべき。それが人間的といえます。
- ・エビデンスを数量的に評価したがる傾向はいいのでしょうか。数量的に表せない場合もあるので、エビデンス観を矮小化でなく拡大させるべきです。世の中の議論があまりにも不十分です。
- ・仮説実証もいいが、そうではなく、情熱実証が大事。
- ・感想そのものがエビデンスです。自身が変化したことがエビデンスです。

7. 早川さんの想い(情熱と理念)が伝わる

早川さんの想いは情熱であり理念であり、これが皆さんに広く伝えたいとのことである。この点から議論した。

- ・何といても情熱が伝わってきます。それは、理屈ではなく熱い想いです。
- ・こうしたらいいとかああしなさいとかではなく(威圧的な教えではなく)、みんなで日常を楽しむことが一番。そこに理屈はなし、強制力はなし、本来の姿です。
- ・自分のままでいい、そのままでもいい、という何ともいえない暖かさが伝わってきて、世界は本当に人間らしい暖かな世界となっています。
- ・研究者は現実と離れて理論中心となっています。早川さんはそうではなく、一人ほとりに寄り添っておられます。そこからの積み上げを大事にされています。
- ・早川さんを理解する各著名人からは、応援メッセージがよせられるのも早川さんが魅力的だから。
- ・特別に何か立派なことを使用ではなく、日常の営みをそのまま楽しもう。まずは遊びから始めます。
- ・書名は、まず遊ぶから始めるにします。

8. 著名専門家や活動家から応援メッセージ

遊びを中心にした子ども、親子、地域の世界は早川さんには当たり前となっている。早川さんにとって、そのことを理解いただいている多くの方々がいるということは何事にも代えがたい宝である。当然ながら多くの方々から応援メッセージが送られてきている。敬称略にて紹介すると、医学系では渡邊久子、坂上頼子、教育系では汐見稔幸、実践系では神谷宏明、活動家では棚田静子、他多数。

- ・早川さんの情熱は天下一品。とてもまねできない素晴らしいこと。自然と応援したくなります。
- ・世の中、理屈先行の方々が多いだけに、情熱の重要性を理解できる方々が早川情熱の必然性を他の有識者に向けても述べたくになります。
- ・早川さんのオーラーに対する応答として著名人含む多くの方々が反応し、これがまた彼らの周辺に広がっていき響き合うこととなります。これにも早川さんの徳でしょう。

9. 今後に向け

早川本を世に出すことで最終調整に入っているの、ここに次の段階として早川本の利活用を含めて早川実践をどうしていくかを論議した。目的は、いうなればバックキャスト(将来を見越して)から今を検討したいからである。

- ・本を出して終わりではなく、次を考えている。
- ・福井では子供の居場所づくりとして福井NPO子どもセンターがある。NPOで保育園も設置している。早川も、

富山でNPO子どもセンターをつくりたくなった。子ども大学、不登校学校も。

- ・協議会的なことも必要では。散在する各団体をセンターに結集して。
- ・稼ぐ組織にしないと続かない。
- ・遊び師派遣を業として制度化して機能させたい。各家にファミリーポートとして派遣。子どものためのモノがない。だから遊び師派遣なのであり、キャッチボールしたり、遊んだり、またカサネもするのです。名古屋では子どもと遊ぶことが制度化しつつあるという。
- ・人材としては、若くして退職した保育士や学校教師にも声をかけていきたい。

A(参考). 早川さんの実践

本の編集構成との関連で実践各論についても言いたい方が続出し、遊び、大学生、保育士についても議論した。なお、彼らの熱い思いが本に凝縮されていることを再認識するためにも、ここで扱うこととした。

(1) 子育てと遊び

- ・子育てに遊びが大事を実感しています。子どもの心を這う組むことに大いに期待。
- ・遊びは人間が生きていく上でのコモンそのものです。これを文化コモンと言ってもいい。

(2) 大学生には

- ・早川さんは富山大学と福井大学にて、遊びをもとにした人格論を展開されています。子ども対象と言っても、未就学児や小中学生を主に対象としていたのに、なぜ大学生か、不思議に思われる方も多いかと。しかし早川さんは今病める若者の成長の手助けには小さい時からの成長過程が大事としています。この点を含めて授業に当たっています。
- ・学生が早川授業を受講することにより、自己成長や信頼関係づくりが目に見えて図られています。
- ・学生側にとって授業では、第一回目にはなぜこんなことする、第二回目は面白い、第三回目は人となりを知る、といった段階を踏んで人の理解心の発展が図られています。びっくり。
- ・早川さんが少年期の子どもと接していて、その子が大学生になってどうなったのかも知りたいところです。大学生には少年期における心の問題を抱える方が少なからずいる今日、早川論の結あそびで大学生が心を丈夫にしていくのですから、大学生向けの遊び論は有意義です。

(3) 保育士にも

- ・早川さんは子育て支援者例えば保育士にもすごく明

るい灯台。保育士にとっては問題も多々あり。

- ・保育士は(子どもの)親を越えられないし、越えなくてもいいと理解するには時間がかかった。何だかんだといっても遊びが一番。子どもが十分に遊べばいいのだ。
- ・早川さんのあそびのWSを含め、早川本は早川さんの化身のようなものです。

【5】 おわりに

討議の結果をまとめ、以下に列挙する。

- ・今度の早川本は自身の活動集大成として位置付ける。早川さんの情熱が多くの方をひきつけるはずである。
 - ・実践は人を動かす。参加者の感想文は早川実践による参加者の反応であり意識表示そのもの。参加者の心情として、感想文は立派なエビデンスである。何よりも参加者の(本の世界の)紙上参加である。
 - ・活動については、エビデンスと共に情熱がもっと評価されるべき。それが人間的といえる。
 - ・各章独立した構成で全体に脈絡を貫くことは、遊びを核にしたこども育ちの多岐多様となる対象にはうってつけである。多岐多様が不思議に自然と互いに繋がる。
 - ・読者については、早川ファンはもちろんの事、若い世代も含めたすべてでもいい。何よりも、ｽｷﾙではなく心に訴えることが目的であるので、子育てや保育などを含め、子ども中心を思う皆さんの心に響き合い、好奇心が喚起され、ひいては文化づくりに大きく寄与する。
 - ・読者にとっては、早川さんからは何といっても情熱が伝わってくる。それは、理屈ではなく熱い想いである。皆さんで日常を楽しむことが一番。自分のままでいい、そのままでもいい、という何とも言えない暖かさが伝わってくる。
 - ・その想いとは、特別に何か立派なことを使用ではなく、日常の営みをそのまま楽しもう。まずは遊びから始めるのである。
- ◇最後に二言；
- ・日常時でも異常時(被災時復旧時)でも、親子遊びが一番大事。この一言に尽きる。
 - ・早川本では、市民社会における行動を積み上げて子ども中心の世界を築くことを大目標にして、学術的ではなく人間的な自然観や感性に基づく人間アプローチによりまとめ上げられていることが一番の特徴である。

【6】 再び早川さん

今日の感想および言い足りないことを列挙する。

- ・ **早川さん、書いてください**

【資料】新本目次

新本・目次＝「大人にこそ必要な」遊び力&子ども力」

先ず隗から始めよ！先ず遊からはじめよ

子どもと一緒に遊ぶという身近な子育てが、家族を救う！

序章 “イタズラ村づくり” という“ロマン”？

神谷宏明が早川たかしの
1章 “大人の心の奥に残る”遊び力&子ども力”の発見
”遊びのワークショップ付き講演”の実際”とその現代的意味
子ども力&遊び力の根拠（3） “一緒に遊ぶ”理論 かわいがりずむ誕生
血を持って、チェコへ？

2章 “4つ条件”整った「遊びのワークショップ付き講演」レポート

富山市地域児童健全育成指導員れんらく協議会の場合
4つの条件が整った完璧な講演が実施

3章 愛と涙の血回し遊び・子育てで“遊戦記”？

若い女子教員レポ 家庭崩壊寸前の1家レポ かわいがりずむ子育て
教員免許更新講座・受講者レポ 父親の子育てレポ（2題林家・浅茅
保育園お母さんレポ

4章 保育園からの遊びの授業 小学校、中学校で、そして高校でも
保育園で遊びの授業 生活科から遊び科へ（「空気砲遊びから宇宙へつなぐ」
中学で遊びのワークショップ付き講演（「心豊かに生きることと遊ぶこと」
星槎国際高等学校・富山学習センターでの授業実践

5章 大学は”遊び場だ！非常勤大学講師・早川たかしの大学授業

はじめに
富山大学経済学部夜間主・総合科目「人権と福祉」の授業実践
非常勤講師の奇策から 講義室を遊び場に？駄菓子屋に？
”事情”を抱えた学生達が、”遊び力&子ども力”で、青春を謳歌？
（児童虐待体験 母子家庭 いじめ体験 引きこもり体験 疑似発達障害？）

6章 お医者様も驚いた！感動した”早川遊びワールド” 子どもの主食は遊びです！

第28回日本小児科医会・富山フォーラムから始まった
わかば歯科小児科物語

7章 街角の暮らしの中に”イタズラ村作り”がはじまった！

遊ばせ隊朝霞支部 たっちゃんの遊ばせ隊 福野・イタズラズ
犬飼小児科物語 熊本ひまわり幼 新生・遊戯亭？
「富山子どもNPOセンター・”遊び力&子ども力研究所”

8章 早川たかしの遊び論&いざら教育実践とは何か

汐見登幸氏 遊びバカ万歳 渡邊久子氏 乳幼児精神保健と遊び
坂上頼子氏 遊び臨床の可能性

10章 イタズラ村親子合宿レポート

林お父さんレポ 東京からの保育士 夫を亡くした母
※2008年事故についてコメント

終章 展望 大人にとっても”遊びは主食” 人の希望はあそびです！

能登地震に遭って、「郡山物語」から学ぶ
「オオカミの群れはなぜ遊ぶのか」
ロヒンギャ難民キャンプの遊びから考える

【写真】；会場風景

